

AIに関するルールの現状とガバナンスのポイント

羽 深 宏 樹

目 次

- | | |
|-------|--------|
| 1. 導入 | 3. まとめ |
| 2. 各論 | |

1. 導入

(1) AIの持つリスク

最初に、AIの持つリスクについて最近の事例を紹介したい。先日の米国大統領選挙でトランプ大統領候補は、テイラー・スウィフト氏が同氏を支持しているようなフェイク画像をSNS上でシェアしてしまった（2024年8月）。また、同年8月には韓国の尹大統領が蔓延するディープフェイクポルノの撲滅を直々に指示したこと、6月には英国のキャメロン外相が偽のウクライナ前大統領とビデオ通話したことを公表した。さらに香港の多国籍企業の会計担当者が、生成AIを用いて英国本社のCFOを装ったビデオ会議の相手に約38億円を詐取された（2024年2月）。またフィジカル

な分野では、2023年10月にGM傘下の自動運転サービスCruiseが、事故の多発および当局への虚偽報告等によって米国カリフォルニア州での営業許可を取り消された。また全米摂食障害協会でも、提供していたチャットボットが相談者に有害なアドバイスを提供したため使用停止になった。このようにAIによる様々な問題やリスクが、ほぼ毎日のように様々な媒体で報じられている。こうした中、世界ではAIに関するルール作りや原則などに関する文書が大量に出回っており、AIガバナンスはグローバルなトレンドとなっている。

(2) AIガバナンスに関する動き

AIガバナンスに関しては、この半年程度の間だけでも重要な動きが相次いでいる。例えば、米



羽深 宏樹（はぶか ひろき）

スマートガバナンス株式会社 代表取締役CEO、京都大学大学院法学研究科特任教授、弁護士（日本・NY州）。AI・データ社会における法律や企業ガバナンス、社会統治を専門とする。東京大学法学部・法科大学院、スタンフォード大学ロースクール卒業（フルブライト奨学生）。2020年、世界経済フォーラムによって「公共部門を変革する世界で最も影響力のある50人」に選出された。主著に、『AIガバナンス入門ーリスクマネジメントから社会設計までー』（早川書房、2023年12月）。AIガバナンス協会代表理事、東京大学客員准教授、CSIS（戦略国際問題研究所）フェローも務める。

（本稿は2024年11月18日に日本証券アナリスト協会で開催された講演の要旨である。）